様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０６１５

研究課題名（和文）日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する基礎研究―日本語作文の縦断調査―

研究課題名（英文）Longitudinal research of Japanese writing ability of foreign children born in Japan

研究代表者
齋藤　ひろみ（Saito, Hiromi）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：５０３３４４６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本で生まれ育った外国人児童のリテラシーの発達の特徴を、作文の分析を通して捉えることを目的とした。外国人住民が多数居住する地域にある小学校（調査開始時は外国人児童が全校生徒の60%弱）で，6カ年にわたって出来事作文のデータを収集し，外国人児童と日本人児童の作文の比較分析を行った。収集した作文は、外国人児童作文が約500件、日本人児童作文が約250件である。作文量や文構造の複雑さ，語彙の使用，文法・表記の誤りなどを定量的に，作文の内容を定性的に分析した。多面的，かつ縦断的に分析を行った結果、日本生育であっても、外国人児童の作文力の発達には、日本人児童とは異なる特徴が見られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reveal the characteristic of the development of the literacy of foreign children born in Japan through the analysis of essays about school trips they wrote. For this purpose the essays were analyzed from several perspectives and investigated longitudinally. We analyzed quantitative the use of Chinese characters and complexity of structure and the amount of the vocabulary were analyzed. In addition, we extract the error of character and grammatical errors, and analyzed them. Furthermore the contents and the structure of the essays were analyzed with qualitatively.
The results show that foreign children even if born in Japan, has features that is different from the Japanese children in the development of literacy.

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：日本生育外国人児童　リテラシーの発達　出来事作文　量的分析　質的分析　横断研究　縦断研究

## １．研究開始当初の背景

科研申請当時（平成 22 年）日本国内の年少者日本語教育の領域では，日本で生まれ育った２世世代の子たち（以下日本生育外国人児童・生徒と呼ぶ）の教育が新たな課題として認識されていた。外国人住民集住地域の学校では，外国人の子どもたちのほとんどを日本生まれの子どもが占めるという状況もみられる。たとえば，齋藤（2008）には，関東のある小学校で，在籍外国人児童 112 名中，日本生まれが 93 名と 83%を占めているという報告がある。土屋（2008）でも，東海地域のある小学校の外国人児童１年生 23 名のうち，滞日期間が５年以上のものが 14 名（66%）と，日本生まれか乳児期来日の児童の割合が高いことが報告されている。さらにこの頃，厚生労働省の人口動態統計年報においても，父母の双方あるいは一方が外国籍である子どもの出生数が総出生数の３％を超えた。こうして教育現場において，2 世世代の日本生育児童生徒の言語発達上の問題が課題として意識されるようになっていた。

OEDD による PISA2003 年調査では，移民生徒の読解および数学リテラシーに関して，半数の国で 25%以上の 2 世世代が基礎的リテラシーのレベル１（比較的簡単な文章から情報を見つけ出す）に達していないことが報告されている（OECD,2006 ）。移民大国と呼ばれる欧米，豪州，そして，シンガポール・香港等のアジアの一部の国・地域では，移民の子どもの言語の発達や学力を人的資本と考え，教授言語の教育を重視してきたが，その充実の度合いが，PISA の結果に現れていたという。

日本においても，日本生育外国人児童生徒の「自らの目標を達成し，知識と可能性を発達させ，社会に参加するためにテクストを理解し，活用し，深く考える能力」であるリテラシーを伸長するための教育・支援が差し迫った課題であることは明らかであった。

## ２．研究の目的

日本生育外国人児童のリテラシーの発達に関し，その重要な要素である書く力の発達の一側面を，かれらの作文の分析を通して明らかにすることを目的とする。日本生育外国人児童の小学２年ら６年までの作文をデータとし，その作文について，量，言語形式，内容・構成の諸側面から分析を行い，日本人児童のそれとの比較を通し，かれらの書く力の発達の特徴を多面的に描き出す。結果は日本生育外国人児童の言語教育に関する多くの示唆を含み，彼らへリテラシー教育・支援現場にとって有益な情報になると期待できる。

なお，本研究では両親の両方あるいは片方が日本語・日本文化以外の言語文化を有する場合に，国籍にかかわらず外国人児童と呼ぶ。

## ３．研究の方法

外国人住民が多数居住する地域にある小学校（調査開始時には外国人児童が全校生徒の 60%弱）において，６カ年にわたって出来事作文のデータを収集し，外国人児童（日本生育，来日外国人児童の２グループ）と日本人児童の作文について比較分析を行った。収集した作文は，外国人児童作文が約 500 件，日本人児童作文が約 200 件の計 700 件である。これらのデータに関し，次の６つ方法で分析を行い，日本生育・幼少期来日外国人児童生徒の作文の力の発達の特徴を考察した。

① 産出量，文の複雑さに関する量的分析
② テキストマイニングによる語彙分析
③ 表記の誤りの分析
④ 文法等の誤りの分析
⑤ ルーブリック評価による内容分析
⑥ エピソード分析による文章構成の分析

なお，本科学研究費による研究は平成 23 年にスタートしたが，作文データは平成 20 年より収集を開始している。紙面の関係で，ここでは，上記の①④⑤の分析結果の一部を報告する。以下，外国人児童を F，日本人児童を J として結果を述べる。

## ４．研究成果

### 4-1　産出量・文の複雑さ―計量分析（横断）

2008-2011 年に収集した F364 件（ベトナム 205，中国 96，カンボジア 22，ラオス 18，ブラジル 5,フィリピン 5，バングラディシュシュ 5,その他 8)，J 作文 209 件，計 574 件の作文データを対象に産出量と文の複雑さに関して計量的に分析を行った。産出量は文字数で(表１)、文の複雑さについては１文あたりの文節数と複文割合で示す（図２，図３）。

表１　文字数

| | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 |
|---|---|---|---|---|---|
| F | 169.9 | 318.8 | 536.6 | 599.6 | 483.7 |
| J | 190.1 | 304.6 | 463.4 | 514.5 | 509.4 |

この結果，産出量(文字数)については，F は中学年で J と同等かそれ以上となった（表１）。文の複雑さに関して，１文の文節数は中学年で差が大きくなり（３年生では統計的に有意な差），高学年で差は縮小するが依然残っていた（図１）。複文割合（図２）からは，J が高学年で文構造の複雑化を見せるのに対し，F は中高学年ではその発達が緩やかで．遅れがあることが示唆される。

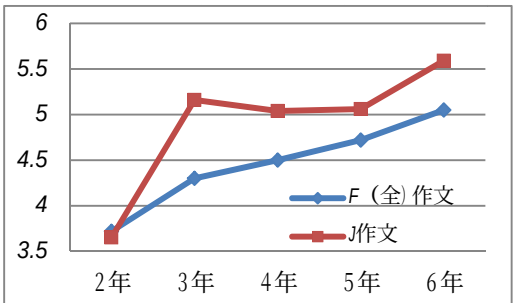


図1　1文の文節数

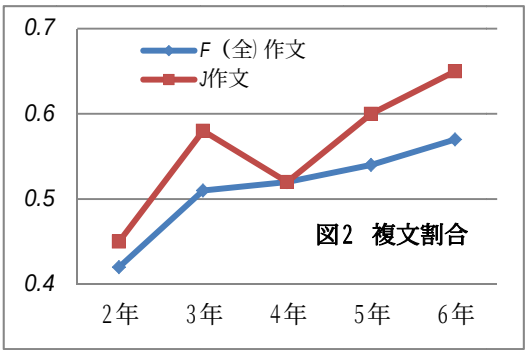
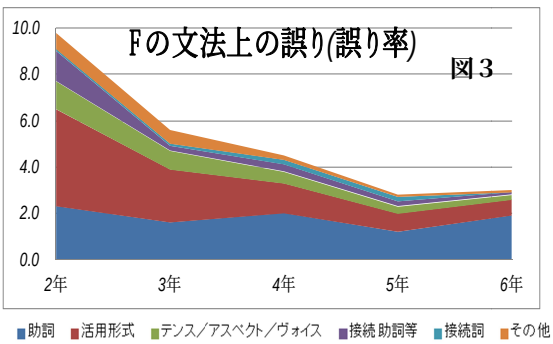
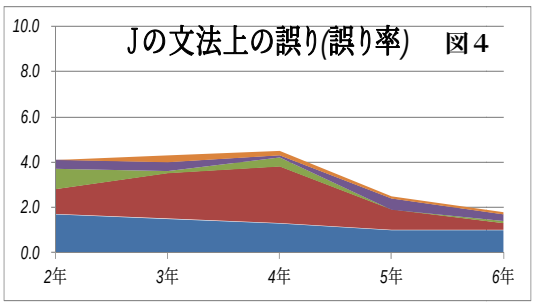


図2　複文割合

4-2　文法上の誤りの分析（縦断）

2007，2008 年度に入学した児童で，2-6 年の作文がそろう F33 名(ベトナム 20, 中国 5, カンボジア 5，ラオス 2，フィリピン 1）と J14 名，計 47 名の 235 作文について，文法上の誤りを抽出して，誤りをタイプ分けして分析を行った。文法のタイプ毎の誤り率（誤り数÷文節数）結果を図の３，４に示す。




Ｆは，２年時の文法上の誤りの出現率はＪの２倍以上であり，タイプとしては活用形式の多さが目に付く。その後，５年生までに正確さが高まるが，６年時点でもなお差がみられる。Ｆが５年までに正確さが大きく変化するのに対し，Ｊは高学年になってから正確さが高まっている。また，Ｆに見られるがＪにはほとんどない誤りに，助詞「は」と「が」の交替，テンス，授受表現の誤りがあった。

このほか，文法に関わる周辺的な誤りとして「話しことば」の混用が見られ，Ｆ，Ｊともに学年に関わらず,一定数見られた。

4-3　ルーブリック評価による内容分析（縦断）

4-2 と同じ作文データを対象に「段落・構成」「文と文のつながり」「出来事」「状況描写」「心情・考え」「全体のバランス」の６項目について，5 段階（評価得点１－５点）のルーブリックを作成して評価を行った。その結果，段落・構成については，Ｆ と Ｊ の間の差が高学年になっても縮まらないが，内容面の「出来事」「状況描写」の項目では，5，6 年で Ｊ とほぼ同程度の評価を得るようになる。しかし，同じ内容面でも「心情・考え」は，中学年で同程度の評価を得ながらも，５，６年で再び差が表れる。図５に「段落・構成」「心情・考え」の 2-6 年の変化を示す。

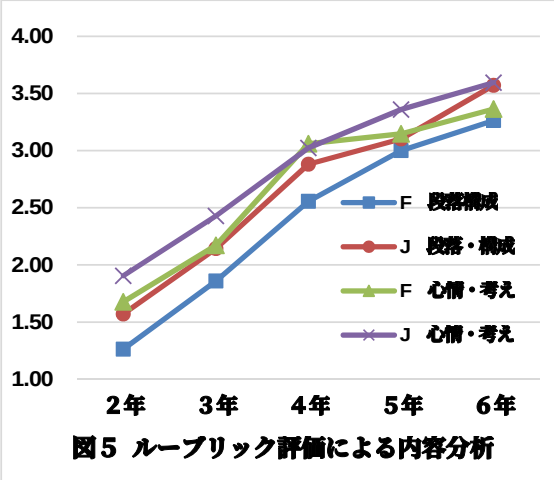


図５ ルーブリック評価による内容分析

4-4　分析結果のまとめ

分析の結果からは．日本生育であっても外国人児童のリテラシー発達には日本人児童とは異なる発達上の特徴があることがわかる。

産出量については，中学年で日本人児童と同等になるが，文の複雑さについては高学年で新たな遅れが生じる。文法上の正確さは，入学時点では日本人児童に比べ誤りが多いが，中学年以降はその違いは小さくなる。しかし，日本人児童には見られない助詞の間違いやテンス等，インプット量に関わると考えられる文法上の誤りが見られる。また，文章構成に関して，外国人児童は日本人児童よりも発達が遅れていることが示唆された。内容面の叙述については，見聞きする体験的な内

容は中学年で日本人児童と同等になるが，心情や考えなど内面の表現は，高学年で再度差が生じている。

総合的にみれば，中学年までに表層的な作文能力は日本人児童と同等に発達するが，その後，日本人児童が見せる文章の質的発達には，外国人児童の発達は遅れを取ると言えそうである。

その他，ここでは結果を具体的に示せなかったが，本研究を通して以下の点も明らかになっている。

・来日外国人児童と比較すると，多くの分析結果で，日本生育外国人よりも，4 歳以降に来日した外国人児童のほうが総じて高く，母語・母文化環境で一定の学習経験を有する方が日本語の作文力の発達においても優位である可能性が示された。
・一方，日本人児童にも作文の力が発達しない児童が少なくなく，調査対象校の地域的特性が大きく関与していると推察される。また，日本生育外国人児童にも日本人児童同等かそれ以上に優れていると評価される作文力を獲得している児童もおり，家庭内の言語及び教育環境が大きく影響していると考えられる。

以上より，地域及び家庭の言語環境とリテラシー発達の関係を明らかにすることの必要性が浮かび上がり，次の課題として取り組む予定である。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）


①齋藤ひろみ, 嶌田陽子, 菅原雅枝, 森篤嗣, 阿部志野歩，北澤尚，日本生育外国人児童の作文力に関する調査―小学 2-6 年生の「出来事作文」の計量的分析―，国際教育評論，査読有，11，2014，53-65

② 齋藤ひろみ，森篤嗣，北澤尚，菅原雅枝，嶌田陽子，工藤聖子，阿部志野歩，日本生育外国人児童のリテラシー発達を追う―作文縦断調査の多面的分析，社会言語科学，査読無，第 16 巻第２号，2014，90-98


〔学会発表〕（計 8 件）


① 齋藤ひろみ，内田紀子，嶌田陽子，菅原雅枝，日本生育外国人児童の文章構成力の発達に関する研究―出来事作文の分析を通して―，異文化間教育学会，2014 年 6 月 7 日-8 日，同志社女子大学，第 35 回大会発表抄録，208-209

② 阿部志野歩，菅原雅枝，嶌田陽子，内田紀子，齋藤ひろみ，森篤嗣，日本生育外国人児童の文法力の発達に関する縦断研究，日本語教育学会 2014 年度春季大会，2014 年 6 月（5 月 31 日-6 月 1 日），創価大学，大会予稿集，361-362

③ 齋藤ひろみ，日本生育外国人児童の作文力の発達―出来事作文の多面的な分析を通して―, 第二言語習得研究会全国大会，2013 年 12 月 14 日-15 日，広島大学，予稿集，64-69

④ 齋藤ひろみ, 森篤嗣, 北澤尚, 菅原雅枝, 嶌田陽子，工藤聖子，阿部志野歩，日本生育外国人児童のリテラシー発達を追う-作文縦断調査の多面的分析, 社会言語科学会，2013 年 9 月 7 日-8 日，信州大学，社会言科学会第 32 回発表論文集，198-207

⑤ 齋藤ひろみ，嶌田陽子，工藤聖子，内田紀子，菅原雅枝，外国人児童の作文能力に関する縦断研究-小学２～６年の「出来事作文」の内容分析を通して-，日本語教育学会 2013 年春季大会，2013 年 5 月 25 日-26 日, 立教大学, 大会予稿集, 303-304

⑥ 嶌田陽子，齋藤ひろみ，菅原雅枝，外国人児童の作文能力に関する縦断調査―小学２年から６年までの出来事作文における複文の分析を通して，お茶の水女子大学言語文化学研究会, ポスター発表, 2012 年 12 月 7 日，お茶の水女子大学，当日配布資料

⑦ 森篤嗣，齋藤ひろみ，陳楠，フルゲン・マリア・クラウディア・ワカ, 嶌田陽子，テキストマイニングによる外国人児童の作文の語彙の分析―日本人児童の作文との比較から―，社会言語科学会,口頭発表,2012 年 9 月 1 日-2 日，東北大学， 第 30 回大会発表論文集，24―27

⑧ 齋藤ひろみ，森篤嗣，北澤尚，陳楠，フルゲン・マリア・クラウディア，菅原雅枝，外国人児童の作文能力に関する縦断調査―4 年間の「出来事作文」の計量的分析を通して―，2012 年日本語教育国際研究大会，ポスター発表，2012 年 8 月 17 日-20 日, 名古屋大学, 研究発表予稿集 第１分冊 ，名古屋，25


## ６．研究組織

(1)研究代表者

齋藤　ひろみ（東京学芸大学教授）

研究者番号：50334462

(2)研究分担者

森　篤嗣（帝塚山大学准教授）

研究者番号：30407209

(3)連携研究者

北澤　尚（東京学芸大学教授）

研究者番号：30282784

菅原　雅枝（東京学芸大学准教授）

研究者番号：80594077